

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

袖口でキラリと光る、江戸切子

堀口 徹 東京／江戸切子職人・三代秀石



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



1月17日、プレゼンテーションにて



バイヤーたちにプロダクトを紹介

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりを挑む「匠」を応援する。

「匠」のモノづくりを応援 レクサスが日本全国の

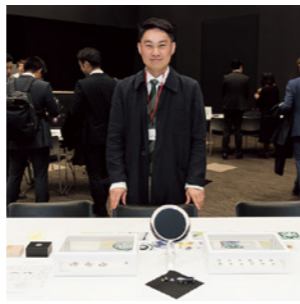
本プロジェクトは2016年、放送作家として料理の鉄人などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏(建築家・東京大学教授)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト)・アート・プロデューサー(下川一哉氏)意匠と匠研究所(らをサポートメンバー)に発足。昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやwebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。また、商談会の終盤ではビームスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE with NEW TAKUMI」新しい匠、新しい暮らして」が発売されるなど、プロジェクトも進化している。



堀口さんの展示ブース

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。東京都選出の匠、江戸切子職人の堀口徹さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。



自作とともに

こだわり極めた
身にまとう切子

直径13・5ミリのクリスタルガラスに、江戸切子の代表的意匠のひとつ「菊花文」をあしらったカプリンクス、ヒアス、ヒンズのシリーズ。堀口さんが製作した「Jewel of Edokiriko」は、身にまとう江戸切子」をテーマにした意欲作だ。プレゼンテーション当日、彼がブースに並べたのは、その新作とカプリンクス、色見本だけだった。

その日初めて会う人たちに自身を紹介する貴重な機会に、なぜガラスやぐい呑みのような江戸切子の代表的プロダクトを持参しなかったのか。自分という職人を知ってもらうには、この「Jewel of Edokiriko」だけあればいい。そう言えるように作ったからです。少し調べてみればすぐにわかるが、彼の活躍の場は工芸だけにとどまらず、海外での個展も高い評価を受けている。にもかかわらず、そうしたことごとく



袖口で個性を主張

言葉がなくともきつと伝わる

今回、新しい挑戦だったのは金属部品のセレクトや加工。カプリンクスは、袖口がタイト過ぎず、かつルーズにもならない形状を選び抜いた。ヒアスから下がるチェーンの長さは、5ミリ単位で変えながら印象の違いを検討した。石留めや彫金の職人などにも教えを請い、妥協なく完成度を追求した結果、納得できる形に仕上がったのはタイムリミット寸前だったという。老若男女みんなが欲しがるといえるものではないですが、伝わる人には深く伝わる。そんなプロダクトになったと思います。

このプロジェクトに参加するにあたり、堀口さんが心に秘めていたテーマがある。自分のものづくりへの思いに共感し、理解してくれる人の輪を広げること。それには、こんなこだわりの強い職人が



エリア・コンサルティングにて



完成プロダクト 「Jewel of Edokiriko」

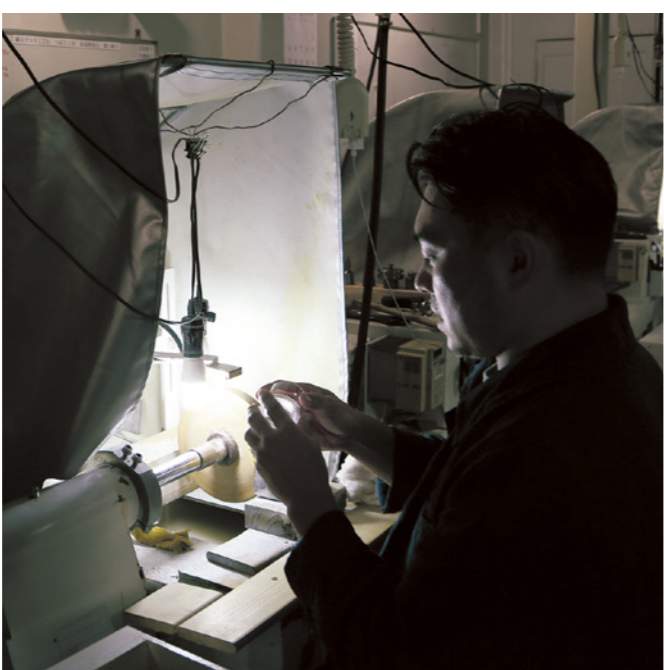
とくど説明しない。この頑固さが堀口徹だ。昨年6月のキックオフ・セッション、その頑固さが強く現れた場面があった。サポートメンバーの生駒氏とクエナエル・ニラ氏を前に「カフスを作りたい」と説明した堀口さん。しかし2人の反応は芳しくない。生駒氏は、今は

カフスそのものの需要が振るわないので難しいだろうと言う。ニラ氏は、海外でもアピールしやすいワイングラスが良いのではと提案した。その場はじっと聞いていた堀口さんだったが、セッションを終えてポツリとつぶやいた。「でも僕はカフスを作ります。モノを見ればわかってもらえる」

10月、工房を訪れた生駒氏に、堀口さんは試作途中のカフスを手渡した。静かに見入る生駒氏が発する言葉を、堀口さんも静かに待つ。「この技術とセンスがあれば、すてきなカフスができそうね。あなたの思いはよくわかりました」。堀口さんが笑顔を見せた。

自信作ができたというところだけ言えればいいと思ってるんです。やがて彼の3分が始まった。プロダクトの概要を説明し、これは自分の自信作だと述べたあと――堀口さんは、30秒ほど無言で会

場を見渡し、そのままプレゼンを終えた。3分では足りないと言いつつ、足りないものならあえて話さない。堀口徹という職人の美学は、ほればほるほど一貫している。



堀口さんの作業風景



堀口 徹
東京／江戸切子職人・三代秀石

1976年東京生まれ。99年二代目秀石(須田富雄氏、江東区無形文化財)に師事し、三代秀石を継承、堀口切子を創業した。2012年には日本の伝統工芸士(江戸切子)に認定、アサヒ飲料、東急プラザ銀座をはじめ企業や商業施設とコラボした製作を行う。09年と10年、江戸切子新作展で最優秀賞を受賞。

LEXUS
NEW
TAKUMI
PROJECT